

## ヨハネの手紙第一1章3節「私たちとの交わり」

### 1A 私たちとの交わり

#### 1B 「私たち」

1C 肉体を取られた方

2C 永遠のいのち

#### 2B 「交わり」

1C 一体化

2C 交わりのいけにえ

3C キリストの血肉

4C 新しい一人の人

### 2A 御父と御子の交わり

#### 1B 父と一つの方

#### 2B 御霊による新生

#### 3B 神の家族

### 3A 全き喜び

## 本文

ヨハネの手紙第一を開いてください、私たちの聖書通読が、ヨハネの手紙の学びに入ります。午後に一節ずつ見ていきますが、今朝は 1 章 3 節を見てください。「**私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。**」ヨハネが、この第一の手紙を書いている目的の一つが、交わりを持つためだということです。

### 1A 私たちとの交わり

私が初めて、「交わり」ということばを教会で聞いた時に、何とも言えない違和感を覚えました。そもそも、イエス様をまるで、自分に近い人であるかのように語っている、あの親近感が気持ち悪く感じましたが、それだけでなく、他の人たちと「交わる」という言葉を聞いて、キモイと思ったのをはっきり覚えています。日本語で「交わり」は、「付き合い」という意味もありますが、男女の交際や、性交さえも意味するからだと思います。あまりにも、近すぎる関係を意味している言葉です。ギリシア語では「コイノニア」と言いますが、これはまさに、「一体となる、一つになる」という意味であり、人間的には、あまりにも近すぎる関わりなのです。

初代教会のキリスト者は実に、その近さで迫害を受けていました。ローマ帝国がキリスト教会を迫害し始めました。迫害した時に、その理由の一つが、その仲間同士の結びつきでした。「兄弟・

姉妹」と互いに呼び、互いに愛し合うことを強調していたので、性的に結び付きがあるのではないかと疑ったのです。それから、イエスの裂かれたからだ、また流された血にあずかる聖餐式は、人肉を食べていると非難されました。

もちろん、私たちキリスト者、信じている者たちは、これが霊についてのことであり、肉のことではないのです。イエスは、「肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちなのです。」と言われます(ヨハネ 6:63b)。しかし、霊において、確かに、これほど近い、親密な結びつきを持っているのは、この世にはない喜びです。

人々は、信じる前の私のように、そんな近い関係は持ちたくない、思うことでしょう。一定の距離を取って生きることを選びます。あるいは、ほとんど関係を持たないことさえあります。ネットでの付き合いだけを選ぶ人もいます。それは、自分の語ること、行うことによって、自分が拒まれることを恐れるからです。本当に親しい友でなければ、自分の弱さを含めて分かち合うことには危険がともなうことを知っているからです。そして、結婚というかたちでも、同じです。同伴者が、自分と相手と同じぐらいの献身の度合いがなければ、うまくいかないことを知っています。自分の大切なものも犠牲にするのですから、慎重になります。

しかし、キリストにある者たちは、恵みによって、霊において、そうした恐れを抱かずに、安心して、一つになることができるのです。天から与えられるところの交わりです。これが、今朝学ぶことであります。交わりにある喜びです。

## 1B 「私たち」

### 1C 肉体を取られた方

使徒ヨハネは、初めに、「あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです」と言っています。彼の言っている「私たち」とは、誰でしょうか？1節と2節に、イエスが肉体を取られて、この方に触れたことについて話しています。「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、自分の目で見たもの、じっと見つめ、自分の手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて。このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証して、あなたがたに伝えます。」

ヨハネは、他の弟子たちと共に、この方が肉体を持っていることを知っていました。彼は注意深く、この方に血肉があることを証言しました。彼の福音書のほうでは、十字架の上で息を引き取られた後に、ローマ兵がわき腹を槍で突き刺しましたが、「すぐに血と水が出てきた」とあります。そしてヨハネは、「それを目撃した者が証している。」とかなり強調しているのです(19:34-35)。この方が、幻や幽霊ではなく、確かに肉体を持っていたことを知っていたのです。そして、主がよみがえられた後も、トマスが、「釘の跡に指を入れ、脇腹に手を入れなければ、決して信じない。」と言った

のですが、主が現れて、「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。」と言われました(20:27)。

ですから、ヨハネが言っている「**私たちと交わりを持つ**」とは、「イエスが神であり、神の御子であるのに、肉体をもって現れた」という証言の中に、交わりを持つということです。この方が確かに、肉体をもって人々の間に住まわれたことを信じている者たちの間の交わりです。ヨハネは、この交わりの感動を、1節で言い表していますね。初めからおられた方、すなわち永遠の神を、肉声で聞くことができました。自分の目で見ました。じっと見つめることもできました。手で触ることさえできました。そう、永遠の神であられるのに、血肉ある人として接することができたのです。そして、私たちの交わりは、神を手に触るかのように触れることのできる交わりなのだということです。

ところで、人は、単体で生きられません。人が人と、直に触れている時、生きることができます。肉体は、神から与えられたものであり、自分の身体を持っていくことで、人はその人格の触れ合いをします。13世紀のこと、フリードリヒ二世という王が、ある実験をしました。赤ん坊に、一切語りかけないという実験です。母親から乳児を取り上げて、看護師たちに養育させます。その時に、一切語りかけません。そして触れてもいけないという規則を課しました。それでその国の言語であるドイツ語を話すかどうか？という実験です。どうなったか分かりますか？赤ん坊はみな、死にました。話せなくなるとは想像はしていましたが、まさか死ぬことになるとは想定外だったようです。<sup>1</sup>

肉体を持っていくことは、犠牲が伴います。時間を取るし、自分のお金も費やさないとはいけません。けれども、その犠牲にこそ愛というものがあります。相手への気持ちが伝わります。ヨハネは第一の手紙で、「子どもたち。私たちは、ことばや口先だけでなく、行いと真実をもって愛しましょう。(3:18)」と言いました。兄弟が困っている時に、世の財を用いて憐れみを示すのです。パウロは、異邦人の多い教会に対して、遠くにいるユダヤの兄弟たちに支援金を集めました。その時に、マケドニア地方の兄弟たちは、貧しいのにも関わらず、惜しみなく献げたのですが、パウロはこう言っています。「Ⅱコリ8:4 聖徒たちを支える奉仕の恵みにあずかりたいと、大変な熱意をもって私たちに懇願しました。」ここの「あずかる」という言葉は、コイノニアなのです。具体的に財を用いることによって、遠くにいる兄弟たちと交わるのです。

だから、神は霊であるにも関わらず、肉体を取られて私たちの間に住まわれたのです。交わりをするためです。そして、肉体を取られたことを信じている者たちの間に、生きて、交わってくださるのです。ですから、私たちの交わりがいかに大切であるかが、お分かりになると思います。

しかし、使徒たちの時代に、そうした交わりから離れて、知識を持っていることこそが大事だとしていった者たちがいます。それが、第一の手紙では「反キリスト」と呼ばれています。御子を否定し

<sup>1</sup> [https://www.digma.com/digma-images/video-scripts/fredericks\\_experiment.pdf](https://www.digma.com/digma-images/video-scripts/fredericks_experiment.pdf)

ているのです。パウロは、テモテへの第一の手紙で、「間違っ「知識」と呼ばれる反対論を避けなさい。」とテモテに指示しています(6:20)。そういう人たちは、「高慢になっていて、何一つ理解しておらず、議論やことばの争いをする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、ののしり、邪推、絶え間ない言い争いが生じます。」と警戒しています(6:4)。これは、物理的に集まり、共に同じ空間で過ごし、キリストを共にあがめるところにあるところにある集まりを、単なる知識に取り替えてしまっているからです。

今の時代は、あまりにも仮想が多いです。現実や実体の代わりに、それに似通ったものを造り出しています。それらは、補完する働きはありますが、取り替えることは決してできません。世にある化学技術は、私たちのいのちを助けはしますが、それ以上でも以下でもないのです。しかし、現実はその取り替えています。仮想と呼んでよいでしょう。初めは、テレビなどの映像が出てきました。次にインターネットによって、相互のやり取りができるようになりました。さらに SNS によって、そのやり取りが加速化しました。そしてネットで会うこともできるようになりました。今や、AI によって、知能までもが作り出すことができるようになりました。このように、あまりにも仮想が多いので、実体にとって替えることができるのだと思いがっている人々が数多くいます。

しかし、使徒たちが当時、戦っていた異端は、グノーシス主義に影響された仮現説というものでした。イエスご自身が仮に現れたということです。肉体を取っているように見えて、実はそうではなかったということです。まさに、仮想の世界が発達している今、知識があればそれがすべてだと思わせている今、この異端が現実味を増しています。しかし、イエスが先ほどのフリードリヒ王の実験のように、人が生で語らず、触れあうことがなければ、人は死んでいくのです。

## 2C 永遠のいのち

そして、2 節には、「御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのち御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのち」とあります。神であられる御子が、人となって現れたところに、永遠のいのちがあるというのです。いのちは、個体にあるものではありません。結びつきにあります。交わりの中にあります。互いに関わり合っている中で、生きるのです。イエス様は、御父に祈られる時に、永遠のいのちを次のように語られました。「ヨハ 17:3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」知ることでありとています。この知るは、親密に知る、人格的に知ることで、夫婦が相手を知るという時に使う言葉と、同じです。そのように知っているところに、永遠のいのちがあるのです。

## 2B 「交わり」

### 1C 一体化

もう一度、繰り返しますと、交わりのギリシア語、コイノニアは、一つになっていることを示しています。夫婦が一体になることについて、主がこう言われました。「創 2:24 それゆえ、男は父と母を

離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」ここの「一体」はエハドというヘブル語です。そして、主は、ご自身が唯一の神だと宣言されましたが、同じエハドを使っておられるのです。「申 6:4 聞け、イスラエルよ。【主】は私たちの神。【主】は唯一である。」主はご自身が、三位一体の神で、父、子、聖霊が交わる、交わりの神だと言っておられるのです。その交わりにおいて一体となっていて、唯一の神なのです。だから、神のかたちとして人を造られた時に、男から女を造り、二人が一体となり、その実が一人の子とすることによって、一つになることを示されました。

### 2C 交わりのいけにえ

その交わりをよく示すのは、共に食べることであり、主は律法の中で教えておられます。祭司が主に献げるいけにえに、「交わりのいけにえ」があります。そこで、祭壇の上で焼かれた肉の一部は、祭司が食べ、また礼拝する人々が食べます。そして主ご自身は、祭壇で焼かれる脂肪や腎臓などを食することを示しています。共に同じものを食べることによって、それが中に入って、一つになることを示しているのです。それが、交わりです。

### 3C キリストの血肉

そして、肉体を取られたキリストご自身と交わるのに、私たちは、主ご自身によって定められた聖餐があるのです。過越の祭りの食事において、主が、パンを裂いて、「わたしを覚えるために、これを取って食べなさい。」と言われます。それは、この方が裂かれた肉、打ち傷によって裂かれた肉を示しています。そして、「これは、あなたがたのために流される血で、新しい契約のしるしです」と言われて、ぶどう酒の杯を弟子たちに渡されました。血を示しています。そのことによって、主とともに交わり、また互いに主にあって交わるのです。

主は言われました。「ヨハ 6:54-56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。」このようにして、主の流された血と、裂かれたからだを共に受けることによって、私たちは互いに交わりを持ち、いのちを保つのです。

### 4C 新しい一人の人

そして、私たちは神の恵みによって、とてつもない一体感を味わいます。平和を享受します。人間の知性や経験では、必ず壁ができます。男女の性別にある壁。経済的、社会的な格差。国や民族が違えば、大きな壁が互いの中にあります。しかし、そこに共通した、足りないものがあります。それは、神ご自身と自分との間にある壁です。人は罪によって、神から離れています。それによって、神によってしか埋められないものを、他のものにより頼んで生きています。

当時、ユダヤ人と異邦人は、全く異なる文化圏と生活圏に生きていました。そこにある壁はとて

つもなく大きいものでしたが、教会が生まれ、共に礼拝を献げました。パウロはそれを、「新しい一人の人」と呼びました。「エペ 2:15-16 様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し、二つのものを一つのからだとして、十字架によって神と和解させ、敵意を十字架によって滅ぼされました。」ユダヤ人とではないですが、他の国のキリスト者と、共に主を礼拝する時に、私たちはその一体感を味わいます。それが自分では決してできない、天からの恵みであること知ります。油したたるような豊かさです。天においては、キリストが血を流されたということだけで、贖われ一つの民とされた私たちが、イエスをほめたたえます(黙示 5 章)。

また当時のローマ社会では、自由人と奴隷が共に同じところにおいて、平等に主を礼拝することも考えられませんでした。それが脅威となって、迫害の原因にさえなりました。インドには、ヒンズー教のカースト制がありますが、底辺の階層にいる人々の間でリバイバルが起こっています。なぜなら、キリストにあって一つになるという恵みと平安を手にしたからです。

## 2A 御父と御子の交わり

そしてヨハネは、「**私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。**」と言いました。私たちがただ直接、交わって一つになるのではなく、父と子の交わりにあって一つなのです。

### 1B 父と一つの方

主イエスと父は、一つです。それは、この方が神であることを示しています。しかし、それだけの理解では、十分ではありません。イエスが、御子として御父と交わりをしていたというところにあって一つなのです。

イエス様は、安息日に癒しの働きを行われました。38 年間、足なえの男を立ち上がらせ、床を運ばせました。それを労働とみなしたユダヤ人指導者は、迫害を始めました。イエス様は答えられました。「わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。(ヨハネ 5:17)」それをユダヤ人たちは、イエスがご自分を神と等しくしたことに怒り、殺そうとさえ思うようになります。それでイエス様は語られるのです、「5:19-20 まことに、まことに、あなたがたに言います。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様に行うのです。それは、父が子を愛し、ご自分がすることをすべて、子にお示しになるからです。」子が父に倣うように、イエス様は神に倣っておられます。また神は父として、イエス様を愛されて、それでご自分の持っている権威をすべてこの方にお渡しになります。御父と御子の間に交わりがあり、それで父子は一つになっていました。

## 2B 御霊による新生

そして、私たちは、神のかたちに造られましたが、罪によって、その栄光から損なわれてしまいま

した。しかし、キリストの流された血によって、私たちの罪は清められます。そこで、神はご自身の御霊によって、私たちを新しく生まれさせます。「ヨハ 1:12-13 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」神によって生まれて、神どもになりました。

### 3B 神の家族

ゆえに、ヨハネの言っている、「**私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。**」というのは、大きな意味を持つのです。御父と御子にある交わりがありますが、その交わりの中に、私たちを招き入れてくださるのです。この方が一つであられるように、父と子の中であって、私たちの一つになります。そうやって、神の家族ができます。神と子羊が一つです。しかし、私たちが、神とキリストに留まることによって、私たちもこの方であって一つに結ばれ、また一つになるのです。イエス様が、ユダヤ人に捕えられる前に祈られた祈りがあります。御父に対する祈りです。そこに、一つになることの願いが書かれています。

ちょっと長い引用になりますが、ヨハネの福音書 17 章 21 節から 23 節までを読みます。「17:21-23 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。またわたしは、あなたが下さった栄光を彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。わたしは彼らのうちにいて、あなたはわたしのうちにおられます。彼らが完全に一つになるためです。また、あなたがわたしを遣わされたことと、わたしを愛されたように彼らも愛されたことを、世が知るためです。」

すごいですね、完全に一つになるべく、主は私たちに働きかけておられるのです。言い方を変えれば、神の家族です。神を父としています。そしてキリストは子です。しかし、キリストにあって私たちは、この父子の関係の中に入れられました。養子縁組になりました。イエス様は神であられるのも関わらず、ご自身を長子、長男となり、私たちがその兄弟関係に連なる者たちとしてくださいました。こうやって、神の家族の中にある喜びを、私たちが味わうようにさせてくださったのです。

### 3A 全き喜び

ですから、その交わりの結果は喜びです。「1:4 **これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。**」どうか、みなさんがこの喜びを手にしめますように。いや、手にしていることを御霊によって、深く知ることができますように祈ります。御父また御子の交わりに招かれているのが、キリストが肉体を取られた方であることを知っている私たちの仲間なのだということを知ることができますように。そして、互いの交わりにある喜びに満たされますよう、祈ります。